

【月刊】

URL: http://www7b.biglobe.ne.jp/~catch_peace2008/

キャッチピース

今月の一枚



No. **160**

通巻 237 号

2009/01/20



ストップ! ガザ攻撃 キャンドルメッセージ 原爆ドーム前
(09/1/16、ピースリンク広島・呉・岩国提供)

この号の内容

- 核兵器のない世界へ 新しい風が吹きはじめた
ICNND への公開書簡 … 田巻 一彦
- オキナワから トウキョウから 43 … 太田 武二
- 高校生平和大使からのメッセージ
「いつか花咲く」という言葉を胸に … 原田 愛美
スピーチで涙流し … 原 菜々実
- オキナワの基地の二ヶ月 … 皆川みずる
- 青木雅彦さんの死を悼む … 田巻 一彦

編集発行人 ●脱軍備ネットワーク・キャッチピース

●維持会員 (月額) 個人 1口 1,000 円 団体 1口 2,000 円 ●参加会員 (月額) 個人 1口 500 円 団体 1口 1,000 円

●通信会員 (年額) 1口 3,000 円

(会費には本誌購読料が含まれます)



核兵器をめぐって、世界には間違いなく新しい
気運がひろがりつつある。

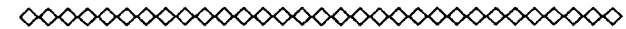
発端は、シュルツ、キッシンジャー、ペリーそして
ナイ、冷戦下で「核兵器の守護者」だった米国の
4人の元高官が07年、08年に発した「核兵器のな
い世界へ」のメッセージだった。最初のアピールか
ら2年がたった今、ヨーロッパでは元高官の賛同のア
ピールが相次いだ。最近のドイツの元高官(シュミッ
トラ)の声明は、「ドイツの残された米国の核の撤去」
を要求している。これも最近のことだが、英国の元

核兵器のない世界へー 新しい風が吹きはじめた。 日本の市民も風を起こそう。

田巻一彦 (キャッチピース/ピースデポ)

将軍たちは、「トライデント・ミサイルはいらない」
と、見ようによっては反核運動と同じようなスロー
ガンを見出しにつけた投稿を「タイムズ」に行った。
そして、きわめつけは、「核兵器のない世界をめざす」
との公約を掲げた、オバマ新政権の登場だろう。

しかし、不思議なことに、世界で唯一核兵器が戦
争で使われた日本の政治家や元政治家から、この気
運に応える動きがないことだ。なぜなのか、を論じ
る前に、僕たちは世界的な気運を、直接受け止めて、
「核兵器廃絶」を具体的に、政治的意志として突き
出してゆくことなのだろう。



このような中、一つの国際有識者委員会が日豪政府(最初の提唱
者はオーストラリアのラッド首相)の肝いりで、昨年10月に第1
回会合を開いた。「核不拡散・核軍縮に関する国際委員会」、略して
ICNNDがそれだ。ギャレス・エバンス、川口順子、日豪の外相経験
者が共同議長を務めるこの「トラック2」(政府間でも市民レベルで
もない)の委員会が、どのような議論を進め、今年10月予定の報
告書でどのような勧告を発表するのか。大いに興味があるところだ。
というよりは、「核兵器のない世界」を具体的に手繰りよせることに、
この委員会が貢献するためには市民社会からのインプット、関与が
求められているのだ。

そのような問題意識から、今年1月「ICNND日本NGO連絡会」が
発足し、委員会への要望を政策提言の形で提案し、「核兵器廃絶世論」
を心機一転巻き起こそうと活動を開始した。ここに紹介するのは、
その連絡会が最初の仕事として取り組んだ、ICNNDへの「公開書簡」
である。一読を。そして、「連絡会」への参加を。

ICNND 日本 NGO 連絡会

〒223-0062 神奈川県
横浜市港北区日吉本町1-30-27-4 日吉グリューネ1F
NPO法人ピースデポ
TEL: 081-45-563-5101 FAX: 081-45-563-9907
E-mail office@peacedepot.org
ブログURL <http://icnndngo.japan.wordpress.com/>

核不拡散・核軍縮に関する国際委員会（ICNND）

共同議長 川口 順子 様

共同議長 ギャレス・エバンス 様

委員各位

諮問委員各位

<公開書簡>

「核不拡散・核軍縮に関する国際委員会」への日本市民からの期待と要望（案） 第2回会合（ワシントンD.C.）に寄せて

日豪両政府のイニシアティブによる「核不拡散・核軍縮に関する国際委員会」（ICNND）（以下、「委員会」）の設立は、核兵器廃絶のために日本各地で活動を続けている NGO と市民を強く勇気づけています。

私たちは、「核兵器のない世界」に向けた世界的気運を、具体的な政治的意志と行動へと結実させる必要性を強く感じています。その意味で、核問題に関して特別に重い歴史的経験と責任を有する日・豪が指導力を発揮し、その下で「行動指向型の報告書をまとめ、各国の政治的指導者に働きかけ、実際の核軍縮等を促す」とする委員会の基本方針を、私たちは支持します。

このような立場から、委員会への期待と要望をお伝えするために、本書簡をお送りします。

まず始めに、第2回会合において、被爆者の発言の機会が設けられたことを私たちは心から歓迎するとともに、川口、エバンス両共同議長をはじめとする各位のご努力に感謝いたします。被爆者の体験と肉声は、核軍縮・核不拡散を論じるすべての者がたえず立ちかえるべき厳粛な原点です。地域会合や第3回以降の会合でもこのように被爆の実相に触れる機会を是非取り入れていただきたいと思えます。とりわけ私たちは、今年10月に日本で開かれる会合が、広島か長崎、もしくはその両方で開催されるよう要望いたします。

私たちが重視する政策課題

ワシントンD.C.での会合では、最終的にまとめられる提言の柱が重要な議題になると聞いております。委員会の問題意識が極めて多岐にわたることを承知した上で、私たちは、とりわけ以下に述べる重要な政策課題について、委員会が具体的で実質的な提言を生み出すことを期待します。

1. 核兵器禁止条約を含む、核兵器非合法化のための世界的な枠組み

米、欧各国の元高官らの度重なるアピールという形で顕在化した「核兵器のない世界」への希求は、各国NGOのかねてよりの訴えに響きあうものであり、広く世界の市民の要求でもあります。私たちが委員会に期待するのは、この国際世論を「政治的意志」へと変えることを促す提言です。私たちは、核兵器の本来の残虐性と、核兵器の使用及び使用の威嚇を、一般的に国際法とりわけ人道法に違反するとした1996年の国際司法裁判所の勧告的意見を踏まえ、委員会が「核兵器の非合法化」のための国際協議を、時間枠を定めて開始することを提言するよう要望します。核兵器禁止条約等、

4 月刊キャッチピース No.160 2009.01.20. 1988年6月18日第三種郵便認可（通巻237号）

包括的な規範文書に関する交渉とともに、兵器用核分裂性物質生産禁止条約（FMCT）早期交渉開始、そして包括的核実験禁止条約（CTBT）の早期発効を促進するための提言が含まれることは言うまでもありません。

2. 安全保障政策における核兵器の役割の縮小

「核兵器のない世界」のためには、核保有国において「核抑止政策」を見直す議論を起こすことが避けて通れません。さらに、自国として核兵器を保有していなくとも、核保有国がさし掛ける「核の傘」に依存する安全保障政策をとっている少なからぬ国々においても、現在の安全保障政策を見直すことが求められます。日本とオーストラリアもそうした国々に含まれます。私たちは、「核抑止」や「核の傘」に代わる、人々が安心して、安全に暮らすための具体的な政策的選択肢を、委員会が検討し、提言の中で示すよう要望します。そこには非核兵器地帯、先制不使用、消極的安全保証などに関する拘束力のある取極めが含まれるでしょう。

3. 原子力の民生利用に対応する核不拡散のための新しい手立て

気候変動との関連で世界的な原子力民生利用の可能性が語られています。私たちの委員会への要望は、民生利用に内在する「核兵器に転用可能な機微技術・物質」の拡散というリスクを、あらゆる側面から極小化するための具体的な手立てを検討し、提言に反映させることです。昨年秋の「米印核協定」とそれに続く2国間協定の拡がりによって、核不拡散条約（NPT）体制が大きな試練に立たされています。この課題にいかに対処するのか、さらには保障措置、安全確保、警備体制が不確定なままの施設の建設や運転、機微物質・技術の移転の規制などの問題が検討されるべきでしょう。加えて、産業界の倫理・行動規範についても、提言において明確に言及するよう要望します。

4. 北東アジアにおける地域的非核・平和システムの構築

世界中の大きな期待と注目を集めながら、北朝鮮の核問題をめぐる6か国協議が一進一退を続けています。北朝鮮の核の放棄と朝鮮半島の非核化のためには、北東アジア地域における持続的な非核・平和のシステムの構築が不可欠です。この観点から、アジアで開催が予定されている地域会合などで、「北東アジア非核兵器地帯化」に関する複数の提案を吟味し、それらを核兵器禁止条約などグローバルな構想と相互に強めあい共鳴しあうものとして深化、発展させることが提言に盛り込まれるよう要望します。

NGO・市民との協力の拡大を

最後に、政府間協議から自立した「トラック2」である委員会が大きな成果をあげるために、私たちは市民社会の一員として、最大限の努力を行ってゆく所存であることをお伝えしたいと思います。そのために、委員会に要望したいのは、NGO・市民に対する十分でタイムリーな情報提供を行うこと、そして委員会の会合において、NGO・市民の意見表明、意見交換の機会が公式に与えられることです。これらの点について、共同議長並びに委員各位のご理解とご努力をお願いいたします。

2009年2月6日

ICNND 日本 NGO・市民連絡会

共同代表 田中 熙巳（日本原水爆被害者団体協議会）

同 土山 秀夫（核兵器廃絶ナガサキ市民会議）

同 内藤 雅義（日本反核法律家協会）

同 森瀧 春子（核兵器廃絶をめざすヒロシマの会）

※本連絡会は、「核不拡散・核軍縮に関する国際委員会（ICNND）」が、世界が核廃絶への道筋を着実に歩んでゆくための提言を生み出すことを願いつつ、市民社会からの参画と協力を拡大することを目的に2009年1月25日、東京で発足しました。

（たまき かずひこ）

月刊キャッチピース No.160 2009.01.20. 1988年6月18日第三種郵便認可（通巻237号） 5

太田 武二
(命どう宝ネットワーク)

43

オキナワから トウキョウから

辺野古の浜に咲く花 (09/2/11、辺野古浜通信より)



琉球正月のご挨拶

キャッチピースの紙面をお借りして読者の皆さんへ琉球正月のご挨拶をするようになってから何年になるのでしょうか。日頃のストレス解消と夢と希望を開くために泡盛を呑み続けてきた作用によるアル酎ハイマーがとみに進んできたということもありますが、過去のことを思い出す暇もないほどの現実の厳しさと未来への希望に少なくなった脳みそのエネルギーが消費されているお蔭様で、新暦の正月から琉球暦の正月を経て、更にご先祖様のお正月の16日が過ぎてゆく中で国の内外、沖縄での理不尽極まりない企業、行政、軍隊などに隷属する非人間化した人間らの蛮行、愚行の数々に大事な心を奪われる日々を送ってきました。

それにしても年々歳々その悪質さが募ってきていると感じるのは、私だけではないはず。それだけ新たな時代の夜明けが近いということなのか、雪崩を打つようにしてこのままの勢いで世界が崩壊していくのか、柄にもなく考え込む一時もある今日この頃です。前号でも報告しましたが、今年は沖縄にとっての歴史的な節目であるだけでなく、その他多くの人々にとって歴史を画する節目の年という点で、まさに今後の激動を予兆するような日々が続いています。

その中で「チェンジ」を錦の御旗に格好良く登場したバラク・フセイン・オバマ氏が第44代の大統領に選出され、政治の世界ではいち早くアメリカが変わったと感じたときもありました。しかし、空前の200万人

を前にした就任演説はどれも評価が分かれたようです。というのはお膝元のウォール街では、株安、ドル安からの反転はなく、経済の先行きは暗さを深めています。そして、主な閣僚人事のなかでプッシュ政権の国防長官だったロバート・ゲーツが留任し、イラクからの撤退の一方、アフガンへの増派を決めたり、イスラエルのがザ攻撃と虐殺を無視することなどから言っても、チェンジへの期待は急速に覚めてきたという感じではないでしょうか。

仲井間沖縄県知事の訪米とは

そのオバマ次期大統領の就任式を前に1月6日から11日米国を訪れていた仲井真沖縄県知事が15日帰沖しました。訪米中、アーミテージ元国務副長官らと会談し、米軍人らの事件事故の防止などを訴えて回ったというのですが、仲井真知事にとって最大の懸案である米軍普天間基地の移設問題については殆ど触れずまいだったそうです。それというのは、昨年の秋にも計画された時に、県議会で多数を占める野党議員の反対で一度つぶされ、辺野古については触れないという県議会の縛りがあったからということです。結局のところ、来年1月の名護市長選挙と秋の県知事選挙に向かったのデモンストレーションに過ぎないもので、米軍基地の削減ではなく、建設業者の代表たちを連れて埋め立て案への変更を探るといった政治姿勢に改めて強い反発が起こったといえます。

更には、知事が訪米中の沖縄嘉手納基地に、2年前

の2月以来の2度目というF22 ラプターステルス戦闘機12機が飛来しました。2という数字ばかりが続いて変な感じですが、兎に角10日から12日にかけて米国防ラングレー空軍基地所属の要員250人も到着し、3ヶ月の長期間居座り、嘉手納基地所属のF15や岩国基地の海兵隊HA18戦闘攻撃機と合同演習を行なうということです。また、例によって日米軍事一体強化のために配備期間中、航空自衛隊との共同訓練実施についても前向きな姿勢を示しているそうです。

実は飛来した時の一機が緊急着陸し、現場を目撃した住民からは「事故の危険性が高まった」「配備中止を」と不安の声。しかし、米空軍は「予防的な着陸でトラブルはなかった」と説明。着陸直後の機体を消防車など緊急車両数台が取り囲み一時騒然としたにもかかわらず、我が物顔で轟音を撒き散らしながら連日早朝からの訓練飛行を強行し続けているのです。

不発弾爆発の恐怖

その訓練飛行の強行で、中部地域一体が戦場のような轟音に包まれ、住民生活が不安と被害に襲われていた最中に、南部の糸満市で文字通りの戦争状態に陥る事態が発生しました。沖縄戦当時の不発弾が爆発し、水道工事中の重機の男性オペレーターは重傷を負い、付近の老人施設では割れた窓ガラスで男性入所者が負傷。爆発現場には直径5メートルほどの穴が開き、200メートル四方に石や土砂が大量に飛び散り、近隣の寺や老人施設の窓ガラスが100枚以上も割れ、文字通り64年前の戦場が悪夢ではなく突然現実に甦ったのです。実際に沖縄戦を体験してきたお年寄りの人たちがどれほど驚いたことか、昔体験した極限の恐怖感の蘇りを思うとやり切れない気持ちで一杯です。

こうした不発弾の事故で大きな犠牲が出たのは、1974年3月に那覇市小祿の幼稚園で起きた爆発事故で、幼児1人を含む4人が死亡、34人が負傷する大惨事でした。その後も、不発弾の爆発事故が相次ぎ、多数の死傷者が出ていて、政府によると、復帰から2008年末までに、県内で発生した不発弾爆発で死傷者が出た事故は16件。死者6人、負傷者56人に上っているといえます。

戦後これまでに約7,200トンの不発弾が処理されたとは言っても、未だに2,000トン余の不発弾が地中に眠っているといわれています。沖縄の地で生きる人々は、これから80年以上も地下に潜む危険の上で何時爆発するかもしれない不安の中で生活を強いられているのです。その根本的な原因は、日米両政府が戦後の全

面的な安全対策をサボり、軍事基地化を推し進めたためであることは明白です。まさに人間の住む島としてではなく、太平洋の要石という不沈空母にした結果なのです。

それにも拘らず事故から2週間以上がたつ中で、日本政府の公式見解として「現時点で事実関係や責任の所在などが明らかではなく、答えることを差し控えたい。不発弾処理や被害補償などに関する新たな法整備については、現時点で検討していない」とし、国の全額補償は難しいとの見解を示しました。今までもこんな理不尽な沖縄人の命を軽く見た切捨てが数え切れないほど日本国政府によって多くの日本国民の知らないままに行なわれてきました。

過去の沖縄戦の集団自決に関する教科書問題も未解決のままですが、今回の不発弾被害に対する日本政府の非道な対応は、断じて許せないものとして必ずや琉球正月明けの春には沖縄中の怒りが爆発するに違いありません。

東村・高江で、沖縄防衛局の愚挙

一昨年の夏、辺野古の新基地建設の事前測量のために海上自衛隊の護衛艦を出動させたのを覚えていますか。今回、辺野古の新基地と連動して新型攻撃ヘリ・オスプレイの導入のために新たなヘリパッド建設が予定されている東村・高江でも、それにも勝る愚挙というか愚挙としか言えないことが起こっています。

というのは、沖縄防衛局が東村高江区の反対住民を相手に、ヘリパッドの移設工事の通行妨害禁止仮処分を那覇地裁に申し立てていたことが明らかになったのです。その申し立ては昨年11月25日付だったのですが、沖縄防衛局はその事実を約一カ月間公表しませんでした。しかも住民側の弁護士によると、8歳の少女まで訴えており、裁判所に提出した資料には両親とその少女の住民票のほか、家族の戸籍証明なども添付されていて単純な事務手続きのミスなどではなく、その



高江で低空飛行する米軍ヘリ

(09/2/3、北陵のジュゴン調査チーム・ザンより)

ことを指摘された後に取り下げたという体たらく。

去る1月27日に那覇地裁でその第1回審尋が行われました。余りにも杜撰な手続きに裁判所からも何点もの主張内容の確認があったといいます。意気軒昂なのは訴えられた住民と200名以上が結集した支援者たちです。池宮城弁護士は、「国側が基地に反対する住民に裁判を仕掛けてきたという話は聞いたことがない。仮処分は本来、個人対個人の権利関係を調整する民事上の手続きだ。国家権力がこれを悪用し、裁判所の手を借りて弱者を押さえつけようとするもので、きわめて悪質。戦後64年、日米同盟の名の下に沖縄は基地を押し付けられてきた。国策によって世界的に貴重なやんばるの自然と、高江に暮らす人々の暮らしが破壊されているのか。国策というなら、国は地域に受け入れられるよう最大限努力を尽くすべきだ。住民の行動は生存権を保障した憲法上の正当行為で妨害行為などと評価されるものではない。」と沖縄防衛局の愚挙に怒りをぶつけていました。

その審尋の日、那覇地裁前での集会には辺野古からも10人近くが支援にきていました。国から訴えられた住民代表も多くの支援者の前で、自信をもって闘うことをアピールしました。結局、20分で第1回審尋は終了。住民代表のひとりの女性は「戦争中、自分たちのおじいやおばあが実に悲惨な目に遭わされた。いま自分たちが、平和に向けての闘いを放棄したら、再び自分たちが、被害者はもちろんのこと加害者にもなりかねない」と発言し、最後まで闘いぬくことを決意表明して参加者の気持ちをやる気満々にして終えたということです。

中曽根外相の訪沖が意味したのは

それから麻生政権の中曽根外務大臣が、2月初旬、国会審議の合間を縫って就任後初めて沖縄を訪れました。何のために、何故この時期にかといえば、何のことはない結局アメリカのため、日米軍事再編強化のためなのが見え見えでした。というのは、中曽根外相は1月23日に初登庁したヒラリー・クリントン国務長官に就任祝いの電話を入れ、その上で在沖海兵隊のグアム移転を含む日米軍再編の着実な実施などを通じた日米安保体制の一層の強化を含め、日米同盟を一層強化していくことなどを確認していたからです。

そして、その後クリントン国務長官就任後初の外国訪問が日本になったと大きく報道されたのは皆さんご存知の通り。ですから、中曽根外務大臣の沖縄での動きは、見事にその線に沿っていて、在沖米軍トップの出迎えを受けて辺野古のキャンプシュワブで新基地建設現場を視察し、その後、普天間基地を見渡す高台を訪れ、沖縄防衛局長から騒音や飛行ルートについて説明を受け「本当に民家に囲まれた基地だ」と感想を口にしましたそうです。そして、県庁に仲井真知事を訪ねて会談し、仲井知事に対して「アメリカ軍再編を着実に実施することで沖縄の期待に応えたい」と軍事優先をあからさまに表明して日本に戻ったのです。

そして今何が進んでいるかといえば、米軍再編の一環で、日本が28億ドルを上限に費用を拠出する在沖米海兵隊8,000人と家族9,000人のグアム移転に関し、「国際契約を結ぶ必要があり、しっかりとしたものを作



座り込み 1757日
(09/2/9、ちゅら海を守れ！から)

りたい」ということで、この2月中、つまりクリントン国務長官への手土産として日米間協定を締結することが予定されているのです。要するに、今年中に民主党中心の政権交代となっても、1兆円とも3兆円とも言われた2014年までの財政出動に縛りをかけるために、最近流行の国会審議や情報公開抜きでの強行措置なのです。

オバマ政権の対日、対沖政策は…

問題なのは、インド洋沖での自衛艦の給油活動の延長や今進んでいるソマリア沖への自衛隊派兵なども含め一連の米軍がらみの政策が、民主党の腰砕け状態の中で何となく進んでいることです。実は、この問題への答えが、オバマ新大統領の閣僚人事、とりわけ日本重視といわれる人事にあるとわたしは思っています。

オバマ政権では、米國務省の次期日本部長官に在沖米総領事館のケビン・メア総領事を起用する方針だということです。これも2月末ごろに正式に決定する見通しですが、このメア氏は嘗ての沖縄高等弁務官キャラウエイ同様の植民地支配者然とした悪名高い男です。また、後任の沖縄総領事には在日米国大使館のレイモンド・グリーン日米安全保障政策課長の就任が内定しているというのです。米大使館当局者は「グリーン氏はメア氏同様、在日米軍再編問題に精通しており、米軍再編に対する米側の姿勢に変化はない」とコメン

トしているということからもオバマ政権の対日、沖縄政策がより強硬になることが想定されます。

また、駐日大使にジョセフ・ナイ元国防次官補、国防次官補にカート・キャンベル元国防副次官補、国防次官補にウォレス・グレグソン元在沖米四軍調整官の起用が有力視されていて、オバマ政権が嘗てのクリントン民主党政権が進めた日米軍事同盟の再編強化を踏襲するという本性が明らかになっているのです。

そして、そのことが日本の民主党に対する大きな圧力となって所謂安全保障問題の変質を迫る危険性が強まっていると思っています。実際、日本大使になる予定のジョセフ・ナイ、ハーバード大学教授を中心とするメンバーが昨年12月末に来日し、麻生政権だけでなく民主党の幹部らと会談していたことを私が知ったのはつい最近のことでした。そのことについてのネット情報によると「オバマ次期政権下で(日本の)民主党が安全保障政策でインド洋での給油活動をやめ、日米地位協定などの見直しに動いたら反米と受け止めるとクギを刺す場面もあった」というのです。日本の民主党で出席したメンバーは、菅直人代表代行、鳩山由紀夫幹事長、岡田克也、前原誠司両副代表、岩國哲人国際局長で、「米国の民主党と日本の民主党でお互いに交流を深めることが大事ではないかという貴重な示唆を具体的にいただいた」という鳩山幹事長の発言に隠されている米国からの圧力が垣間見え、その後の民主党の対応の不思議さの理由が分ったような気がしています。それだけに今後の沖縄に対する日米両政府による軍事政策の強硬姿勢が予想されるわけで、まさに時代を画する非武装琉球ネシア連邦への本格的な取り組みが今まで以上に求められてくるということです。

1・30集会からの呼びかけ

前号で予告した「薩摩の琉球支配から400年・日本の琉球処分130年を問う会」が、1月30日沖縄那覇市で結成集会を開きました。参加者が200名近い人数というだけに留まらず、各界、各層からの幅広い結集があったということです。昨年秋からの短期間で、110名を越える呼びかけ人が集まり、確認された規約の中で「節目の年に当たる2009年に琉球人としての自決権を確立するためにこの会を結成し、これを機会に、失われたものを取り戻し、自立していく自覚的な行動を起こします。」との目的と「国連、日本国、沖縄県、鹿児島県へ要請行動を行ないます。」が事業の一つとして確認されました。

これは文字通り画期的なことなのです。それまでの

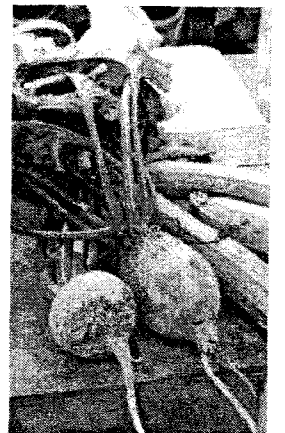
呼びかけでは、沖縄人自らの呼称を「ウチナンチュ」と規定していました。しかし、琉球国500年の歴史と琉球諸島の島々の関係の中では、「ウチナンチュ」とは沖縄島の住民のことでしかないのです。所謂、先島といわれる八重山諸島、宮古群島の住民の自己表現ではないし、奄美諸島の住民にとっても同じなのです。

ということから言って、差別語として長らく封印されてきた「琉球人」という自己規定が、主体的に復活したことだけでも、わたしにとっては感動ものです。このことは「アイヌ」が差別語として封印されてきた中で、アイヌ民族が今年、「北海道ウタリ協会」を50年ぶりに本来の「北海道アイヌ協会」と変えることと軌を一にするものとも言えると思います。まさに前号でも報告したように、薩摩侵略から400年、明治政府による琉球国併合、沖縄県設置という琉球処分から130年の年という節目の年に、100年に1度の世界恐慌の真只中で、琉球と日本、アジアの新たな歴史を創造する分岐点としたいという多くの琉球人の決意が実った集会だったと思います。

その記念講演で彫刻家の金城実さんが「沖縄の人々はこれまでもことあるごとに大衆決起した。『問う会』を発足させることで、これから沖縄の自決権を確立させるための入り口にしたい」と強調。また奄美からの報告では知名町職員の前利潔さんが「奄美の日本への復帰運動で薩摩支配や琉球処分は肯定的にとらえられたが、いまだ総合的な議論はない。400年を契機に歴史を問い直したい」と話したと地元の新聞で報道されていました。

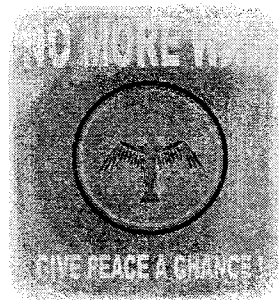
この琉球人と明確に自己認識をする「チェンジ」は、呼びかけ人の一人であり、当日の基調提案者だった金城実さんが言う「沖縄独立は、未来の遺産」に向けての第一歩を確実に踏み出すものでした。そして、「ひいてはアジア、世界の平和と強制に寄与することを目指します。」という目的に向かっての船出でもあることを確認し、世界中で反差別、反戦、人権確立の闘いに苦闘してきた仲間の皆さんと共に闘い続けていくことを呼びかけていくものです。

(おた たけし)



高江のわかちあい野菜 (09/1/31、やんばる東村・高江の現状より)

高校生平和大使 からの メッセージ



高校生平和大使とは

長崎の「核廃絶をめざすすべての核実験に反対する長崎ネットワーク（反核ネット）」の活動から生まれた。98年から毎年8月、ニューヨークの国連本部等を訪れている。

2001年からは「高校生1万人署名」を集め、国連欧州本部に届ける活動も始まった。

「いつか花咲く」という言葉を胸に

高校生平和大使 原田 愛美

国連欧州本部で核廃絶、平和な世界の実現を訴えるのを目的に私たちは日本を出発した。到着して3日後にスピーチをするんだと心に置きながら伊東さんとの練習が始まった。私たちの活動は国連でスピーチをするけれど、英語の試験ではないから心で伝えるのが大切、と伊東さんは言ってくれた。スピーチ前日、私たちは、UNI本部と世界を訪問した。どちらも私たちを快く受け入れてくださり、スピーチをした。訴えたい、と強く思っていたのだが、それとは逆に空気にもまれ、気持ちをしっかりと伝えることができず悔しかった。しかし、この二つの場所で感じたことがある。私たちは日本国内で主に活動をする。そして日本国内で得た平和に対する強い想いを署名という形に託している。今まで、私は国内での活動をたくさん見て感じてきた。しかし、世界に目を向けると、UNIやYWCAでいろいろな国籍の人々が一緒に働き、協力していた。では書記長が「戦争にはNO、平和にはYESと言いましょ。

私たちはあなたたちの味方であることを忘れないでください」と、言葉をくれた。そのとき、平和を願うことには境界がなく、世界中から集まった平和を願う大きな力が私たち自身の活動に勇気をくれ、私たちはそこで得た力と共に世界に発信していけると確信した。

そして、国連でのスピーチの日がやってきた。コーリー国連軍縮会議事務次長とお会いしてスピーチが始まった。私たち全員が前日とはまったく違った気持ちの入ったスピーチができたと思う。最後に、コーリー氏が「あなたたちの情熱は明確で、伝わっている。続けて、広げて、達成させるのは長い道のりです。そこには勇気と努力が必要です。しかし、続けることでいつかは花咲きます。そして、その跡が必ず残っていきます」と、おっしゃってくださった。そして、最後に「国連にはみなさん一人一人の努力が必要です。今日聞いた話を国連でしっかり浸透させていきます」とメッセージをくださった。

私たち一人一人が、あの場所でスピーチをすることができたのは、本当にたくさんの人の思いがあったからである。そしてその署名に込められたたくさんの思いは、いくつかの国際機関で、私たちのスピーチを通してしっかりと伝えられたと思う。

私がこの旅で感じたことは、日本の高校生という小さな力であっても、平和を願う一人の人間として、国連を初めとするいくつかの場所で、私たちの気持ちが伝わった。「伝える」ということは、簡単なことではない。しかし、私たちの周りの人、離れた場所にすむ人、そして世界中の人と協力して本当にみんなが幸せだといえる世界を築いていくのは不可能ではない。そのために、私かこれからもっとたくさんの人に平和の大切さを伝え、一人でも動き出し



てもらえるように活動していきたい。コーリー氏の「いつか花咲く」という言葉を胸に、また再出発をしようと思う。

スピーチで涙流し

原 菜々実

今回の旅で私が課せられた最大の役割は「平和大使が署名を国連に届けるのをサポートすること」でした。前夜、皆で署名をリボンで結んだ際や国連へと運ぶ際、その重みを実感しました。それは体で実感する重さだけでなく、目に見えない重さも含めてです。そして、コーリー氏の手に渡った瞬間には、神奈川で初めて署名に参加した日、私たちへの関心の低さにめげそうになった日、温かく言葉をかけていただいた日、そして、長崎で署名活動に参加した日のことを思い出し、「微力だけど無力でない」ってこのことなんだなあと思いました。

平和大使のスピーチは素晴らしいものでした。前日とは表情も言葉に対する熱意も違って、人のスピーチであれほど涙を流したのは初めてでした。特に原田さんとは羽田空港から何度か練習を共にし、彼女は素直な感想・助言を求めてきたので私は出来る限りそれに応えたつもりです。彼女は神奈川の代表として、立派にその役目を果たしてくれました。

ここからはこの旅で印象的だったことを書きます。まずは下平さんのお話です。以前DVDでは拝見したのですが、それと直接話しをお聞きするのは本当に差がありました。下平さんは今まで言えなかった辛い

経験も話してくださり、それを引き継ぐ我々の責任を感じると同時に、一体世界でどれほどの人に被爆者の方のお話を聞く機会があるのだろうと思いました。神奈川では多くの人がこのような機会を持っていません。また、世界ではどうでしょうか。私と同じようにYWCAや各訪問先で被爆体験を聞くことができた者は世界的に見れば残念ながら少数派だと思います。長崎の高校生が日本語・英語で作成して下さった被爆証言ビデオのDVD化はとても大きな役割を果たすと思います。

また、イーペル市での署名活動では、多くの人が私の聞きづらい英語に足を止め、耳を傾けて私たちの活動に賛同してくださり、平和への関心の高さを感じました。私はそこで、ある親子に出会いました。私の英語を息子がお父さんに通訳し、彼らは署名に協力してくれました。私はそのお父さんの言葉を忘れることができません。「日本人ですね。アメリカ人ではないのですね。」彼らはレバノンからパスポートの関係でベルギーに来ているそうです。レバノンを詳しく知らなかったのですが、その地名を聞いて「紛争」というイメージが漠然と浮かびました。彼らの署名からは平和への思いを強く感じると共に「もし、私がアメリカ人で核



廃絶を訴えたら、賛同してくれなかったのかな」という何とも言えないような気持ちになりました。

この旅を通して「知る」ということが何をするときにも最初のステップになると感じました。下平さんも引用していた「過去に目をつぶる者は未来にも盲目である」という言葉やアンネフランクの家の壁に書いてあった「to build up a future, you have to know the dost」というアンネの父、オットーの言葉からもそれを痛感しました。私の今後の役目は、神奈川の多くの人に最初のステップを入れることだと思います。

(はらだ まなみ、はら ななみ)

オキナワの基地の2ヶ月

08.12.5 ~ 09.2.10



飛行再開したF15戦闘機(嘉手納、08.01.15、リムピース提供)

● 12月9日

カリフォルニア州サンディエゴ市の民間地に墜落したFA18戦闘機の同型機は、墜落後の9日午前8時台も、嘉手納基地で爆弾を装着して離陸するのが確認された。

1日から5日まで嘉手納基地で実施された合同即応訓練に参加した岩国基地所属機で、訓練後も沖縄に19機が残り、訓練を続けていた。岩国基地の所属機のほか、空母艦載機の米海軍所属のFA18も頻繁に飛来し、普天間飛行場も利用している。本島周辺の訓練場で実弾訓練も実施している。FA18機をめぐっては、米本国の機体で主翼の補助翼に亀裂が見つかり、11月から米軍所属機すべてを対象に点検を実施し、全世界で10機が飛行停止、20機が飛行制限となっている。

● 12月12日

名護市真喜屋で10月に起きた米軍軽飛行機墜落事故で、嘉手納基地は12日、燃料切れによるエンジン機能停止が墜落原因などとする事故調査報告書の一部を公表した。燃料切れの原因は操縦士の不適切な燃料計画と飛行判断ミスと結論付けた上、今後の事故防止策として事故機が所属する嘉手納エアロクラブに対して改善点も勧告した。今回の結果を受け、県警は今後独自の事故機鑑定などの捜査を進めた後、米空軍所属の男性操縦士(45)を航空危険行為等処罰法違反容疑で書類送検する方針だ。同クラブは日米地位協定第15条に基づき、米軍人や軍属、その家族の福利厚生のために設置。資格取得前の練習生が教官を伴い、技能取得のための訓練飛行も行うが、乗組員の米兵は事故直後の県警の調べに「遊びで奄美に行った」と供述しており、遊覧飛行の可能性はある。

● 12月13日

嘉手納基地に合同即応訓練のため飛来している岩国基地のFA18戦闘機が13日も朝から訓練飛行を実施した。土曜日にもかかわらず平日同様に外来機の離着陸が繰り返された。同機は11日まで同基地で引き続き訓練を行うと発表していたが、予定日を過ぎた12日、13月刊キャッチピース No.160 2009.01.20. 1988年6月18日第三種郵便認可(通巻237号) 13

国連欧州本部でのスピーチ 原田 愛美

私は日本の中心に位置する神奈川県の高校に通っている原田愛美と申します。私は神奈川県内の高校生約10人でPeace Peace Peaceというグループを結成し核兵器廃絶を人々に訴えています。残念ながら、神奈川県の人々は私たちの声にあまり熱心に耳を傾けてくれません。なぜなら私たちの地域は、戦時中多くの空襲に苦しんだものの幸運にも原子爆弾の被害に遭うことなく終戦を迎えたからではないかと思います。同じ日本であっても、平和に対する人々の思いには温度差があります。しかし、一人ひとりの署名にこめる思いと行動していく勇気が平和な世界を実現させていくのだと私は信じて活動を続けています。

日本は人類史上初めて原子爆弾を投下されました。あの悲劇は多くの命を一瞬にして奪いました。たくさんの悲しみとともに被爆者の苦しみは63年経った今も続いています。私が神奈川県で活動をしているとき、署名をしてくださった1人の方が、自分は広島で被爆したけれど、これから先どんなに年をとっても被爆により亡くなった弟のことや原子爆弾のことは絶対に忘れません。と涙を浮かべながら私たちにお話してくださいました。私はこの思いを無駄にたくありません。私たちの望む平和とは、戦争や核におびえず人々がいつも笑顔で暮らせる世界です。戦争や核兵器のようなものがあっては安心して生活できないし、みんなが手を取り合うことはできません。世界中で二度と原子爆弾が使用され、人々が犠牲になることのないよう私たちは迅速な核兵器廃絶を望んでいます。

日も実弾を装着し離陸する姿が目撃されている。

13日午後7時半ごろ、金武町伊芸区に住む建設会社従業員の玉城陽一さん(25)から自宅駐車場に止めていた乗用車のナンバープレートに銃弾のようなものがめり込んで壊されているとの通報が警察にあった。石川署が調べたところ、銃弾は長さ約4.5センチ、直径約1センチ。駐車場入り口付近のアスファルトで跳ねて字光式ナンバープレートの表部分を貫通し、裏側のプレートで止まっていた。米軍演習場からの流弾の可能性もある。金武町には米軍から8～14日までキャンプ・ハンセンの全レンジで実弾射撃訓練を行うとの通報があった。

金武町議会は15日午前、米軍基地問題対策調査特別委員会を開き、事件現場を視察した。金武町内では伊芸区で1988年に酒造所や沖縄自動車道サービスエリア、民家などでM16ライフル銃の弾頭9発が見つかったほか、87年には県道104号越え実弾射撃訓練でさく裂した砲弾の破片が家畜小屋の屋根に落下、同年に導水管がライフル銃弾で撃ち抜かれるなど多くの流弾事故が発生している。

●12月17日

嘉手納基地報道部は17日午前、米バージニア州ラングレー空軍基地所属の最新鋭ステルス戦闘機F22A ラプター12機が09年1月から約3カ月間、嘉手納基地に一時配備されると発表した。F22の一時配備は07年2月以来、2度目。嘉手納基地に関する三市町連絡協議会(会長・野国昌春北谷町長)は17日午後、幹事会を開き、対応を協議する。

嘉手納基地報道部によると、F22はラングレー空軍基地の第27戦闘中隊の所属。約250人の要員が派遣される。一時配備の理由について「西太平洋における米太平洋軍の安全上の責務を果たすため」と説明している。

17日午前11時50分、恩納村のキャンプ・ハンセンレンジ7の着弾地点付近で山火事が発生した。米軍のヘリ機が消火活動を行い、午後5時35分に鎮火した。火災原因と焼失面積は調査中。

●12月21日

金武町伊芸被弾事件で21日午前、同区の住民約230人が周辺を一斉に捜索し、同区東の住宅と畑を隔てる道路で新たに銃弾と思われる金属片が発見された。金属片は長さ4.7センチ、直径1センチで、14日に民家に駐車していた乗用車に突き刺さっていた銃弾とほぼ同一寸法。今回の金属片の発見場所は銃弾発見の駐車場から約100メートルの場所で、道路の前は畑と沖縄自動車道を挟んでキャンプ・ハンセンに面している。連絡を受けた石川署は午前11時11分から約1時間、現場検証を行い、銃弾は署に持ち帰った。現在、持ち帰った金属片を詳しく調べている。

●12月22日

金武町伊芸被弾事件に関連して、米海兵隊憲兵隊と基地訓練作戦部は22日午前、銃弾発

見後、県警を同行して初めて現場を調査した。この日の合同調査で県警は、21日の住民一斉捜索で発見された銃弾らしき金属片を米側に見せて照会した。米海兵隊は取材に対し「外観から見たところ、2つ目の金属片が最近の海兵隊の訓練と関連したものだとは考えられない」と印象を語った。米海兵隊報道部は、引き続き銃弾と米軍訓練との関係調査のため県警の捜査に協力しながら「(キャンプ・ハンセン内の)射撃場で予定している実弾訓練は通常通り続ける」と説明した。

●12月26日

北部訓練場のヘリ着陸帯新設で、工事に反対する住民に対し沖縄防衛局が妨害禁止の仮処分を申し立てた件で、同局の真部朗局長は26日、報道各社へ経緯を説明し、申し立て対象の住民15人のうち8歳の少女を25日に取り下げたことを明らかにした。地裁決定まで工事は再開しない考えも示した。取り下げの理由について「早期に裁判の判断を求めたいとの観点からだ」と話し、少女を含めたことが不適切だったとの認識はないと述べた。

●12月28日

名護市の米軍軽飛行機墜落事故を受けて、飛行停止していた嘉手納基地内の嘉手納エアロクラブの軽飛行機が28日午前、2カ月ぶりに飛行を再開し、事故同型機の離着陸が確認された。嘉手納基地報道部は24日、飛行を26日から再開することや8項目の再発防止策を発表していた。事故が起きた名護市からは民間住宅地上空の飛行中止を求める声が上がっている。

●1月5日

最新鋭巡航ミサイル搭載のオハイオ級米海軍原子力潜水艦「ミシガン」(母港・ワシントン州バンゴール、16,764トン)が5日、うるま市勝連のホワイトビーチに寄港した。同艦の日本への寄港は初めて。同艦は、かつて核弾頭ミサイル搭載の戦略原潜で、07年、特殊部隊潜入用に改装された。昨年10月、日本に初寄港(横須賀)し、ホワイトビーチにも2度寄港した同型原潜オハイオに続き、最新鋭原潜の寄港が相次いでいることについて、リムピースの篠崎正人さんは「背景には成長著しい中国・インドの経済圏域の安定化を目指す米国の姿勢があり、恒常的な配備につながる可能性もある」と分析。「一時的なものか判断できないが、横須賀に寄らずに直接沖縄に来たことは、支援組織が権限強化され本格的な活動を始めたため、直接命令を受けることができるようになったとみられる」と指摘している。

●1月10日

米バージニア州ラングレー空軍基地所属の最新鋭ステルス戦闘機F22A ラプター6機が10日午後3時50分すぎ、嘉手納基地に相次いで飛来した。約3カ月の間、嘉手納基地に配備される。

● 1月14日

嘉手納基地に飛来した F22A ラプターが 14 日早朝、飛行訓練を開始した。同時刻に、嘉手納基地所属の F15 戦闘機も飛行訓練を行うなど、2 種の戦闘機による合同での訓練が実施されているもようだ。

● 1月20日

嘉手納基地に 20 日午後 3 時半ごろ、米アラスカ州アイルソン空軍基地の仮想敵機 F16 戦闘機 5 機が飛来した。同機の嘉手納基地飛来は極めて珍しい。すでに一時配備されている米最新鋭戦闘機 F22 の訓練に参加するものとみられる。

● 1月27日

普天間飛行場移設をめぐる政府と県、関係市町村の実務者による「代替施設の建設計画・環境影響評価」「危険性の除去」作業班（ワーキングチーム）の第 3 回会合が 27 日、内閣府で開かれた。防衛省が昨年夏に実施した米軍ヘリの飛行航跡調査の結果が報告され、ヘリが飛行場をはみ出して住宅地上空を周回している実態が政府調査でも明らかになった。

● 1月30日

北部訓練場の一部返還に伴うヘリパッド移設問題で、移設先となる同村高江区の仲嶺武夫区長は 30 日、条件付きで移設を受け入れる方針を固めたと明らかにした。沖縄防衛局と交渉するための区の代表を 2 月中に選ぶ考え。同区の評議委員会は 04 年と 05 年の 2 回、移設反対決議を全会一致で採決しており、同区の代表が条件付き移設を容認する方針を示したのは初めて。区の代議員会や区民総会は開かれていない。仲嶺区長は、移設予定地で、座り込みを続ける反対住民に対して、沖縄防衛局が通行妨害禁止を求める仮処分を那覇地裁に申し立てている件に触れ「国も強行的に移設を押し進めようとしている。国と国が進める中で、反対し続けて何の見返りもなく区に移設されるより、条件を付けることで、区民の生活を守ろうと考えた」と説明。また「民間地上空を飛ばさないよう確約することが第一条件。容認はあくまで条件が合えばの話で、嘉手納、普天間でも上空を飛ばさないとの約束は守られておらず、高江でもそうなるなら、すぐに撤回する」と述べ、代表を選んだ後に、代議員会や区民総会を開く方針を示した。

● 1月31日

嘉手納町が実施している騒音測定調査で、米最新鋭戦闘機 F22A と F16 戦闘機が米空軍嘉手納基地に飛来した 1 月中旬以降、70 デシベル以上の騒音発生回数が激増していることが 31 日分かった。騒音が最も激しい同町屋良地区では、F22 が訓練を開始した 14 日から 29 日まで、1 日平均 109 回（06 年度）を大幅に上回る 190 回以上を記録した日が 5 日もあった。

騒音の増加は F22 と F15 戦闘機が住宅地側の北側滑走路を使って訓練しているためとみられる。

● 2月5日

金武町伊芸被弾事件で 08 年 12 月、駐車車両のナンバープレートに突き刺さった状態で見つかった銃弾について鑑定を進めていた県警は 5 日、「M33 普通弾」50 口径（12.7 ミリ）の弾芯とする結果を発表した。弾は、米軍で広く使用されているものという。鑑定のため米軍が県警に提出していた弾と特徴が一致した。県警は今後、米軍訓練に伴う流弾の可能性の有無や発射方向などを特定し、器物損壊容疑も視野に捜査を進める。また事件を受け昨年 12 月 22 日に住民が実施した現場付近の一斉捜索の際に見つかった弾について、県警は「マシンガン API に使われている徹甲焼夷（しょうい）弾の弾芯に類似している」とした。

● 2月6日

米軍キャンプ・フォスターに隣接する北谷町玉上の民家の窓ガラスが基地内からの投石で割られた器物損壊事件で、この民家に同様の投石による被害が約 10 年続いていることが 6 日、住人の話で分かった。民家には現在、65 歳の夫婦が 2 人で暮らしている。民家裏から基地フェンスまでの距離は 70 メートル。裏側は斜面になっており、民家から 10 メートルの高さにフェンスがある。住人の女性によると、約 10 年前から基地フェンス内から外国人の子どもが住宅に向かって投石するようになった。5 日の事件の際も投石する複数の子どもが目撃されている。投石による破損で、これまでに窓ガラスや網戸を何度も取り換えてきた。投石が始まった当初は、何度か沖縄署に被害届を出してきたが、繰り返されるにつれ「（投石に）慣れてしまった」（住人の女性）とその後、通報しなくなった。石は 5 ～ 10 センチ大で、強化ガラスやワイヤで強化した網戸を突き破る威力で投げ入れられている。女性が庭の手入れをしている際に投石されたこともあったという。住人は基地フェンスに面する住宅裏側に、投石被害軽減のための植樹やトタンのひさしを設置した。投石は金曜日の午後によく発生するという。基地からフェンスを乗り越えて民家のそばを通り、キャンプ・フォスター内の学校に通学する外国人の子ども姿も見られ、数年前までは民家敷地内を無断で通行していくことも頻繁にあったという。沖縄署は、器物損壊事件として米捜査機関と連携し捜査している。北谷町は 6 日、沖縄防衛局を通して米軍に、日本側の捜査に協力するよう申し入れた。

● 2月9日

08 年の米軍構成員（軍人・軍属・家族）の犯罪摘発件数（暫定値）は 70 件で、07 年の 63 件から 7 件（11.1%）増え、摘発人数は 63 人で 07 年の 46 人から 17 人（37%）増加したことが、9 日までに県警のまとめで分かった。凶悪犯罪は 7 件 13 人を摘発し、07 年から 1 件 7 人増えた。粗暴犯は 5 件 6 人で 3 件 3 人増、窃盗犯は 14 件 15 人で 13 件 10 人減、知能犯は 20 件 5 人で 6 件 2 人増、その他は 23 件 23 人で 9 件 14 人増。摘発人数の内訳は、

軍人が40人（前年比10人増）、軍属が4人（同3人増）、家族が19人（4人増）。63人中23人が未成年だった。08年に発生した米軍構成員による主な凶悪犯罪は、2月に本島中部で発生した在沖米海兵隊所属の二等軍曹（当時38）による女子中学生暴行事件や、3月に沖縄市で嘉手納基地所属の憲兵隊員と米軍人の息子4人らがタクシー運転手を襲って金を奪った強盗致傷事件などがある。

●2月10日

金武町伊芸被弾事件で伊芸区は10日午前、同区を通る沖縄自動車道沿いに被弾の危険にさらされる同区の危険性を訴える看板を設置した。同区の職員と行政委員が製作。横8.2メートル、縦1.8メートルで、「流弾に注意！ 米軍実弾射撃訓練中」と、自動車道を通行中の運転手にも分かるよう、大きな文字で書いてある。05年には米軍キャンプ・ハンセン内レンジ4の都市型戦闘訓練施設の危険性を訴えて、同じ場所に「流弾に注意！ グリーンベレー訓練中」と書かれた看板が設置されていた。

米軍キャンプ・フォスターに隣接する北谷町玉上の民家の窓ガラスが基地内からの投石で割られた器物損壊事件で、基地内に住む米海兵隊員の息子3人が民家に投石していたことが10日、分かった。米海兵隊員とその息子ら7人が同日、民家を訪ねて被害男性（65）に謝罪した。投石者の特定について沖縄署側は「捜査にかかわることなどで答えられない。器物損壊事件として、米側と協力を得て粛々と捜査を進めている」と説明した。被害男性によると、米海兵隊員3人と小学6年生の息子3人、通訳1人の計7人が10日午後3時ごろ、被害者宅を訪ねたという。被害を受けた男性は「別の子どもたちがまたやる可能性がある。（投石を）繰り返されたら困る」と伝え、基地フェンスを高く設置し直すことなど再発防止対策を求めた。父親に当たる施設管理担当の米海兵隊員が「司令部を通して対策をしたい。（フェンス隣接の基地内）住宅地域で話をし、二度と起きないようにしたい」と答えたという。割れたガラスなどについては米軍の補償機関が補償すると男性に伝えた。

（みながわ みず糸）



青木雅彦さんの死を悼む

キャッチピースの古くからの同志だった、青木雅彦さんが1年以上前になくなっていたのを知ったのはつい先日のことだ。青木さんが活動していた京都の知人から、呉の湯浅さんを通して訃報はとどけられた。

青木さんと最初に会ったのは、京大の学生会館の部屋だった（そこが彼の属する「反戦ドタバタ会議」の連絡先になっていた）。沢山の話をした。青木さんは博学だった。どこでそんな知恵を仕込んだのかと思うような話を、独特の早口で、そして時々皮肉なウィットを絡めていつまでも話していた。

彼が90年ごろに提唱した「ハーフオプション＝軍事費50%削減提案」はキャッチピースだけでなく、他の市民団体にも波紋を広げ、紙面では何度かの意見表明が行われた。青木さんは、活動家仲間の「50%なんて生ぬるい、自衛隊はすぐに解体！」との批判にも粘り強く、丁寧に応じていた。そんな彼の真骨頂とも呼べる活動は「NO MORE WAR」と題されたメーリング・リスト（ML）だった。今では花盛りのMLの「はしり」あるいは「老舗」だった。一日何本も投稿される記事には「百科全書派」（と僕は敬意をこめて呼んだ）青木雅彦の面目や躍如たる情報が詰まっていた。いつも、お得意のちょっと皮肉なコメントを付けて。

その投稿が、ある時から数が減り、最近では目にすることがなくなった。

その頃（いや以前から）彼は誰にもいわずに生活苦と戦いながらパソコンに向かっていたことは薄々感じていた。だから、NMWの活動をキャッチピースとして経済的にサポート（といってもたいしたことはできないのだが）しようともちかけこともある。だが、彼は「いらない」と言葉すくなく辞退した。たしか「義務になるのも、人から口出しされるのもいやだ」という理由を聞いたように記憶している。

青木さんは孤高の人だった。2つも大学を出たのに「立身出世」には全く無縁な生き方を選んだ。それでも、今日に浮かぶのは、夜中のコンビニを冷やかすのが楽しいと話す時の少年のような笑顔だ。そう、青木さんは「孤高の少年」だった。そしてそのまま一人で世を去った。

メールが来なくなったときに「どうしている？」の一言がなぜかけられなかったのだろう、という慙愧の思いだけが、今の僕の心にはある。僕より若い青木さんだが、僕にとっては先生だった。だのになぜ、消息を尋ねるメールのひとつもかけなかったのだろう。訃報を聞いたときも今も思うのは、そのことだけ。

青木さん、よく生きたね。ありがとう。さようなら。 （田巻一彦）

ガザ攻撃

無防備の

大勢のパレスチナ人を殺戮し
イスラエルが得たものは…?

あれはホロコーストだ！

嗚呼、かつて被害者だったユダヤ人が
今やナチス顔負けのこの非道ぶり…。



編集室から

◎前号の表紙写真キャプションに誤りがありました。提供していただいたのは「非核市民宣言運動・ヨコスカ」でした。「非核」が二文字がぬけていました。組織の名前はその活動の意志を表すもの。申し訳ありません。

◎ヒロシマ・ナガサキの被爆体験は、若い人に継承できているのでしょうか。高校生平和大使のメッセージは勇気を与えます。

◎アフガニスタン情勢が気がかりなこの頃。アメリカは戦争の泥沼にまたもや飛び込む覚悟か？

Global Vision !



会計報告 (08.12.07 ~ 09.01.07)

【収入】

1 先月からの繰越	217,135
2 当期の収入	41,000
(1)会費収入	
①維持団体	0
②維持個人	0
③参加団体	0
④参加個人	0
⑤通信会員	38,000
(2)カンパ収入	3,000
(3)運動収入	0
(4)預金利子・資料収入	0

【支出】

3 当期の支出	42,987
(1)郵送費	26,638
(2)文具・備品	13,009
(3)振込手数料	920
(4)分担金	0
(5)ロッカー代	0
(6)雑費・備品	2,420

【残高】

4 次月への繰越	215,148
----------	---------

月刊「キャッチピース」発行●脱軍備ネットワーク・キャッチピース 編集●キャッチピース編集委員会
連絡先連絡先●232-0065 横浜市港北区高田高田東 3-38-15 田巻一彦方 電話・fax ●045-531-1341e-Mail ●QZT04441@nifty.com
郵便振替口座●00160-7-136148「キャッチピース」定価●100円(通信会員年間3,000円)